

金澤古蹟志卷卅一

城北淺野町筋並大衆免

○馬場町

此の地は關助馬場とて、舊藩中は藩士の調馬場ありし故に、今に至り惣名を淺野川馬場と呼べり。其の町數町ありし故、馬場何番丁と稱し、今は一番丁より六番丁まで町々を分てり。元祿六年の土帳に、關助馬場何番丁或は關助何番丁とも載せたり。元祿の頃は如此呼びたりし故也。金澤事蹟必録に、關助馬場は萬治二年小松居住の侍中、今年正月より四月中までに不殘金澤へ引越に付、此地をば居屋敷に賜はり、各家作す。とありて、小松養老附の諸士、萬治元年十月利常卿薨逝に付き、翌年金澤へ搬宅を命ぜられ、關助馬場の近邊にて邸地を賜ふ故に、地名を馬場と稱し、藩士のみ邸地なりしかど、廢藩後は多く退去して、商家共を建築せり。

○關助馬場跡

延寶の金澤圖には次に載せたる如く描けり。三州志來因概覽には、此の馬場延百六十七間。表二條併せて十三間三尺、土居あり。但し内法。とあり。此の馬場、昔佐賀關助と云ふ人の開きたる故に、關助馬場と稱すといへり。されど其の起原は詳かならず。とあり。三州志に云ふ。景周按するに、河北郡淺野山王社記に、古へ九月十二日祭禮毎に流鏑馬笠懸の式あり。其の處今の淺野川馬場也とあり。此の社は一條帝長徳三年鎮座とす。是等古來の引證なる歟。按するに古へ流鏑^(りやう)笠懸並に神事に射る儀式ありて、流鏑馬の馬場は二町を本式とす。馬を通す所は溝形を掘る。之をさくりと云ふ。此さくりの首尾に扇形をなす。是馬を返すため也云々。此由縁にて淺野山王社にも此の馬場ありつれども、戰國後荒廢したりしを、我が公國初に佐賀關助に命じて再興せしむる故、關助馬場の名あるなるべし。前田三代家譜と云ふものに、微妙公駿馬を好み、關助馬場へ出覽し、且自から調馬をも試み給ふといへり。寛文四年關助馬場の沙轉通して入札ありし事、那方帳目に見ゆ。夫以前の事は坊